第十五卷　第三號　三七八

モヘンジョ・ダロの發掘

後藤守一

一、前言

先史時代の印度＝佛教以前＝については、未開拓の野が多く、印度考古學者の興味が佛教關係遺蹟及びそれ以後のものに集中されてゐる今日、學術的發掘の試みが此の印度先史考古學の領野に加へられたことが極めて稀であり、隨つてミトラ(mitra) 氏の印度先史考古學 (Prehistoric India, Calcutta,) の記載の物語るが如く、從來明かにされてゐるものは部分的であり、斷片的であり、不確實であつた。而して此の斷片的にして不確實な從來の見解に從ふと、南印度と中印度とは夫々趣を異にした遺蹟・遺物を有し、異つた文化の對立を想像させるものがあつた。しかるに最近印度河流域のハラッパ(Harappa)及びモヘンヂョ・ダロ(Mohenjo daro)の發掘によつて、上記の二古代文化に對して、明かに他の一文化として對立し得るものを發見し、かつこれがメソポテミヤ地方の古代文化と密邇の關係のあることが明かにされ、印度先史考古學は俄かに新しい進展を遂げることになつた。

この新發見に就いては、既に印度考古調査局總長サー・ジョン・マアシャル(Sir John marshall)氏の報告や、セイス教授の同地發見の印章に對する見解が公にせられ、かつ年々の發掘の結果は印度考古調査局の年報(アニュアル・レポオト)によつて報告されて居り、學者のこれに論及されてゐるものもあり、我國に

於ては濱田博士によつて紹介せられたこともあつて、今更駄足を添へる必要もない樣だが、自分は一昨年春印度の先史時代の遺蹟遺物の見學の旅を重ねてゐた際、幸ひにサー・ジョン・マアシャル氏の厚意によつてモヘンジョ・ダロの發掘現場地に宿ること四夜、其の發掘の現狀を視ると共に、既に發掘せられて、同地所在の小博物館に所藏の遺物の一通りの見學を試みることを得た。詳細な報告は、上述の年報に逐次公にされて行くであらうが、其の重なる遺物を採つて其の紹介を試み、從來一般に知られてゐる見解に一段の詳細を加へることも强ち不要のことでもなからうと思ふ。雜誌の關係上挿圖を多くすることの出來ないのは遺憾である。

註① 文學博士濱田博士氏「印度に於ける最近の考古學的大發見」(歷史と地理第十五卷第一號)

二、遺蹟の概述

ハラツバに近い一小村落の遺蹟（今は單にハラツバの遺蹟と呼んでゐる)—ラホウル (Lahore) とマルタン (Multan) との中間、鐵道沿ひ—を最初に紹介したのは、印度考古學の開拓者サア・アレキサンダア・カンニンガム (Sir Alexander Cunningham) 氏で、記していふに、

「ラビ (Ravi) 河畔の此の廣々とした遺蹟は、高さ六十呎、周圍半哩內外の小丘連なつて三千五百呎の長さをなしてゐる。」

とあるが①、第二十世紀に入つて此の地で發見された印章三個＝今は大英博物館藏＝に全く從來知られてゐない文字の刻せられてゐるのを其の道の權威フリイト博士 (Dr. J. F. Fleet) によつて注意されたが、僅か三個の印章では、同博士も

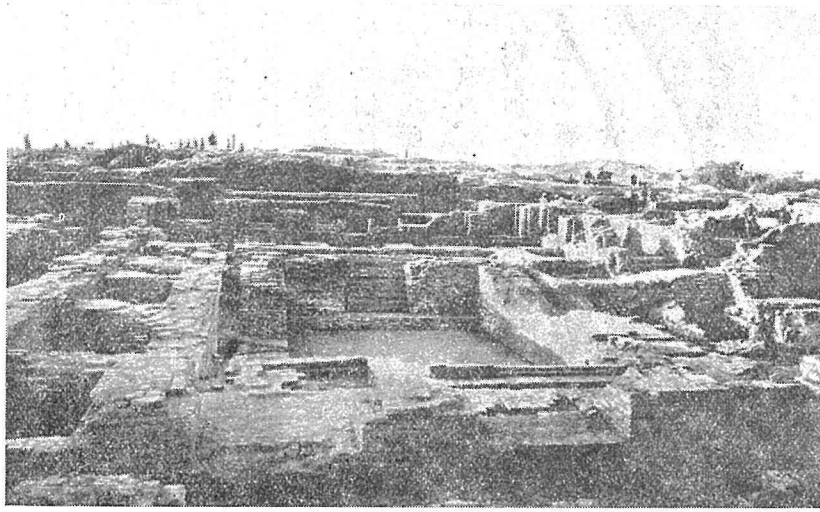
「これを將來の各地の類似遺物の發見にまつて解讀すべきである」

と匙を拋げるより外はなかつた②。

一九二〇年から二一年に亙つて、ダヤ・ラム・ザアニ氏（Rai Bahadur, D. R. Sahni）の試掘によつて更に多くの印章を發見したが、[3]不幸にして此の地は鐵道工事の際著しく破壞されてゐるので、遺蹟に於いても、遺物に於ても、到底モヘンジョ・ダロのそれに比肩することは出來ない。併し不完全ながら、此の地が七八層に亙り、紀元前三世紀以前、長い間住居せられてゐた聚落址たることが明かにされた。

越えて一九二二年、バナアジ（Mr. R. D. Banerji）氏は、シンド（Sind）地方のラルカナ（Larkana）州所在、土人のモヘンジョ・ダロ（Mohenjo-daro）＝モヘン（Mohen）或はモハン（Mohan）の丘の謂＝と呼ぶ小丘上の佛塔廢墟の發掘を試みた。

第一圖　モヘンジョダロの一部



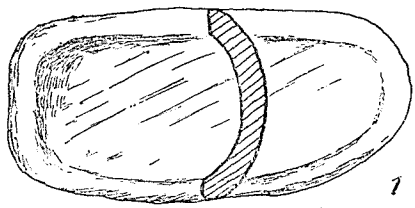
ところが、發掘の業が進むに從ひ、其の塔の下に古い市街のあつたことが發見され、更にその下にもう一段古い住居址のあり、これらから銅器・土器・玉器・骨器等の驚くべき豐富の遺物を出土せしめた。

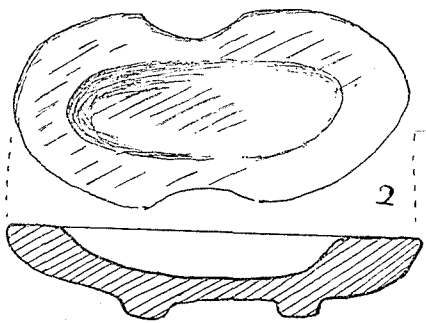
そこで、印度考古調査局では、マアシャル氏の

指揮の下に發掘の計畫を進め、その塔のある小丘を發掘し了り、今はその隣の丘に手を延してゐる。

この丘は、往時印度河流中に屹立してゐた小島であり、その形の比較的大きかつた爲めに、周圍に散布してゐた小島群中の中心をなし、其の小島群と共に、恰度イタリヤのベニスの如く、水上の一都市を形成してゐたのであらう。今、印度河は其の流を轉じ、爲めに一帶は河床を露出した原野と化り、當時の小島群は今、高さ二三十米突、雜樹雜草に被はれた小丘群に變つてゐるが、上に散見する日乾煉瓦破片によつて市街址であることを想はしめられる。

第二圖　モヘンジョ・ダロ發見の石皿





市街はすべて煉瓦造りで、室は比較的小さく、方形をなし、湯屋の如き獨立の職業もあつたし、陶工などもすでに分業となつてゐたことを知ることが出來る。

註

① Aach. Sur. Report. Vol. V, (1875, pp. 105-108)

② Journal of the Royal Asiatic Society, for 1912.

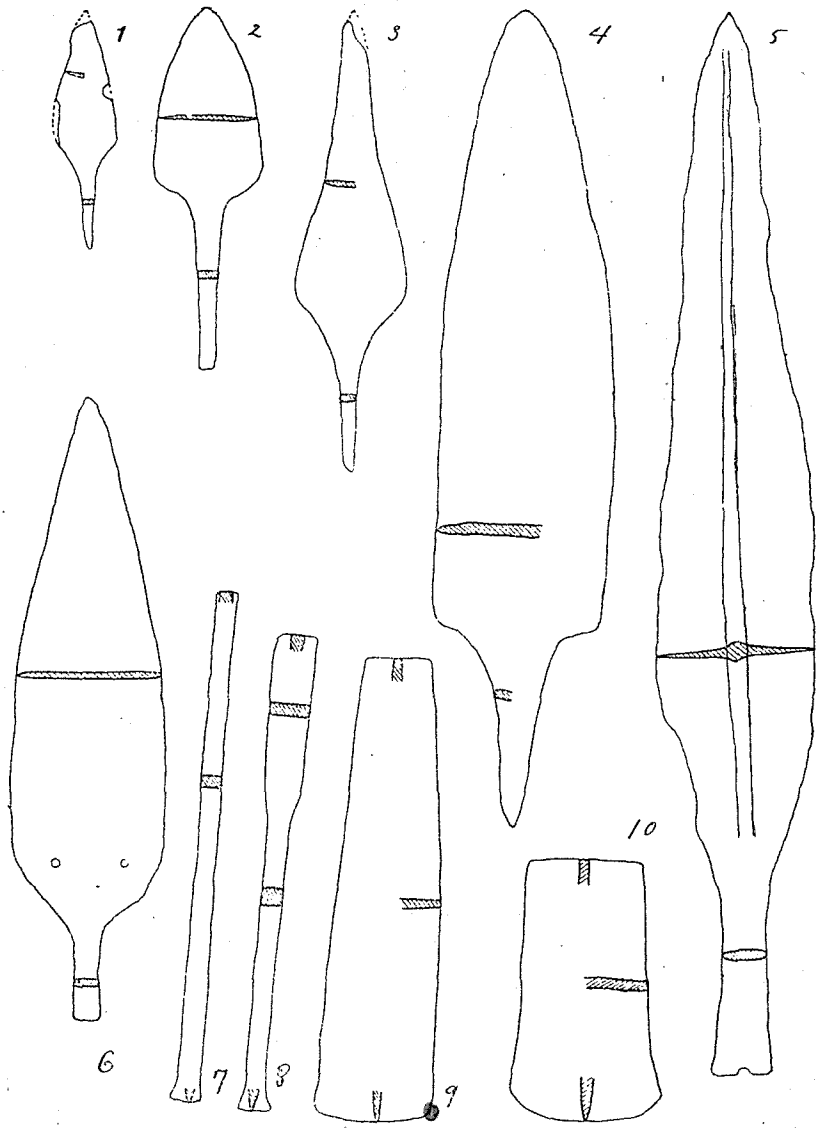
③ Annual Report of Archaeological Survey, Hindu and Buddhist Monuments. Northern Circle, for the year 1920-21, Gahare, 1921.

三、發見の遺物

今、其の第一及第二都市址出土の遺物の中で最も著しいものゝ大體を紹介しやう。

石器（第二圖）　石器類は極めて乏しく、僅かに石皿二個を注意したゞけである。1は無脚丸底、長

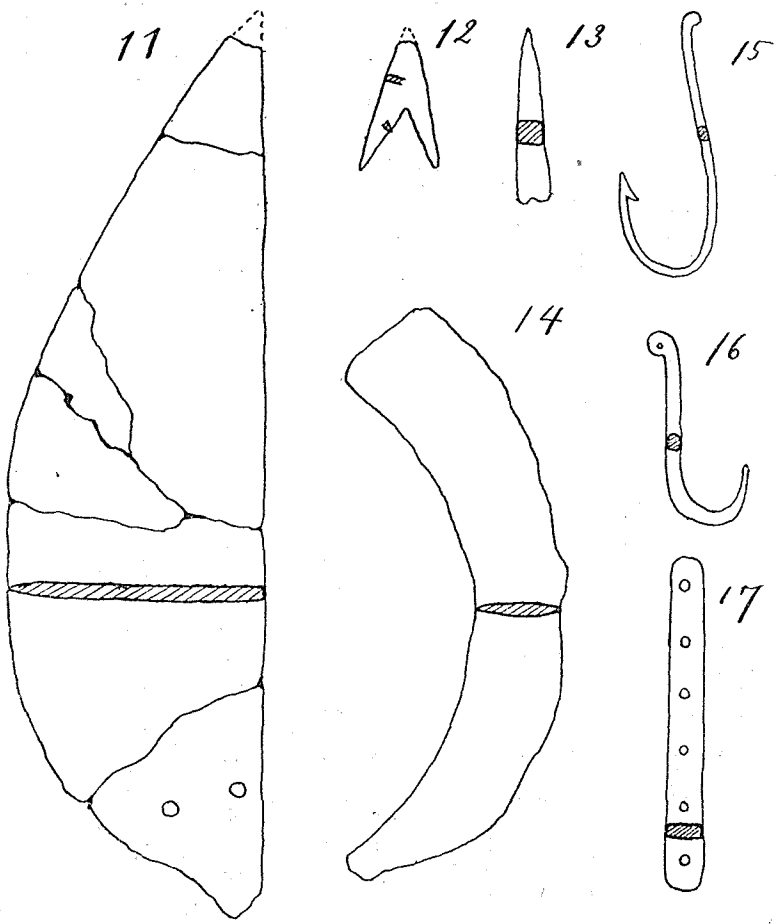
第三圖　モヘンジョ・ダロ發見の銅器（其一）



さ四四糎。2は二脚あり、側縁に半圓形に近い抉がある、長さ五八糎。二個ともに家什に屬するもので、石鏃・石槍の如き利器系統のものでないことを注意すべきである。

銅器　すべてが純銅（コッパー）又はそれに近い銅を材料として居り、青銅（ブロンズ）質のものは一つも發見されてゐない。種類に槍身・斧・鑿・鏃・庖丁・鎌・錐・鉤・針等がある。1から6までは銅槍身であらう。1は長さ六・

第四圖　モヘンジョ・ダロ發見の銅器（其二）



七糎の小形のもの、銅鏃とも考へられ得られる。2は長さ一八・八糎、圖の示すが如く平根をなし、3は長さ一九・五糎、身幅は著しくこけて、尖い鋒となつてゐる。4は長さ二一・八糎、身幅四・五糎もあつて少し扁平に過ぎるが、重ねも三粍あつて、實用に堪へるものと思はれる。5は長さも二八・三糎あり、切斷圖を見なければ袋穗の槍と思はれるもの、更に身に脊のあるは注意に値する。6は長さ三八糎もある長いもの、莖に近くある双孔は柄を緊縛すべき糸を通す爲めのものであらうか。

以上六個の例の示すが如く、すべてが莖を有する型式のもので、袋穗のものゝないのは、スメール地方のものと趣を異にして居る點である。

7 8は鑿の如きものであらうか。7は長さ二三・五糎、8は二〇糎。

9 10は銅斧頭、共に短冊形の石斧から脱化したと思はれるもの、9は長さ二二糎、10は長さ二〇・五糎。類品には10型式のものが多い。

12は銅鏃であらう。腸扶が著しく發達した三角形式のもの、長さ二・三糎。すべて五十六個を實見したが、皆同一型式であつた。著しく薄手であり、かつ小形であるところが、シュリイマン博士によつて發掘されたトロイ遺蹟出土のものに似通ふてゐると共に、アナウ・スウサ又はウル發見のものと趣を異にしてゐるのは注意すべきことであらう。

13は身の斷面四角形をなし、尖い鋒をなしてゐるので、鏃身とも考へ得られるし、又錐と推定も出來る。錐（圖を略す）は長さ八九糎、斷面の圓形のを普通としてゐる。

11は庖丁の身であり、14は鎌身と考へてもよくはなからうか。15 16の如き釣針は、あまり多く出土してゐないが、15の如く逆刺あるものもあり、

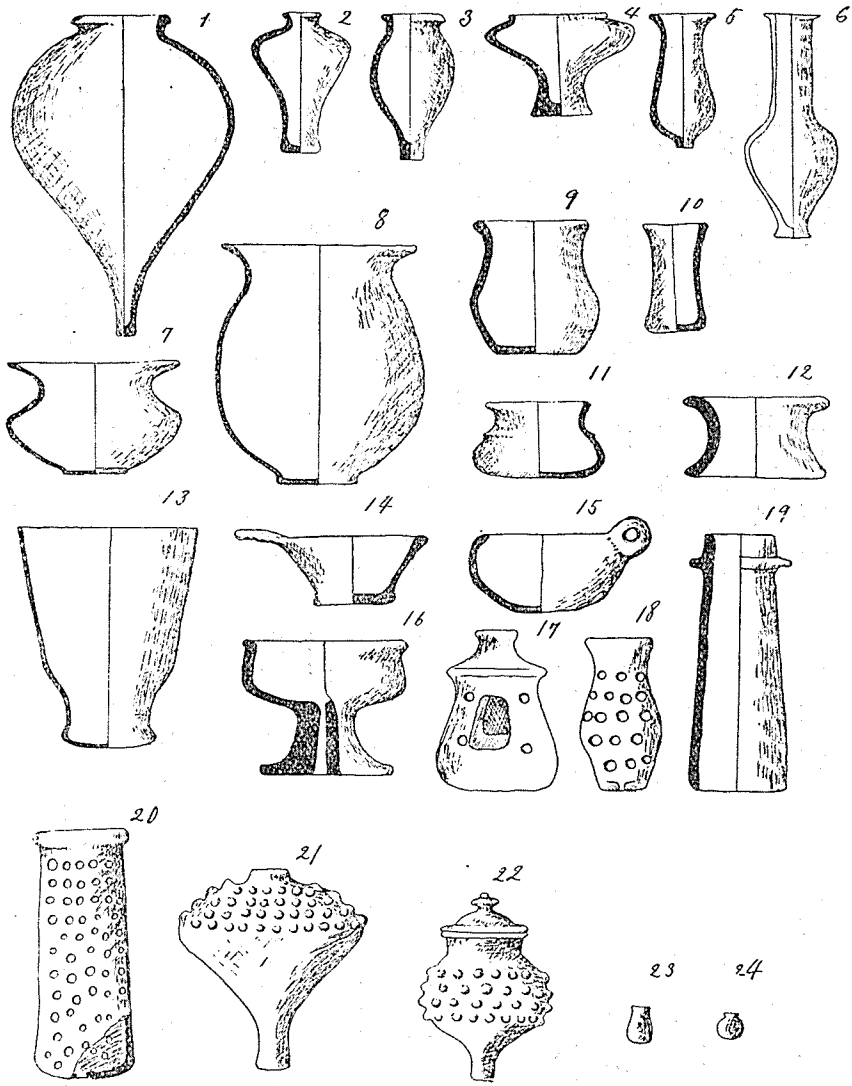
16の如くないものもある。これを用ひて當時の住民がインダス河に釣を試みたことが想像される。

17は銅製、長さ五・五糎、六孔が畧ぼ等距離に穿たれてゐる。恐らく玉を通した糸を列べ貫ねたものであらうか。

土器（第五・六圖）　土器には彩文土器（ペインティング・ポッテリイ）があつて學界の視聽をあつめてゐるが、有文・無文共に素燒であり、燒成火度の極めて低い、世にいふ土器（アアスン・ウエイア）に屬するものであり、器形は比較的簡單で壺の系統のものが最も多い。無文土器に小形のものゝ多いのは注意すべきであらう。先づ無文土器（第五圖）の種類について記さう。

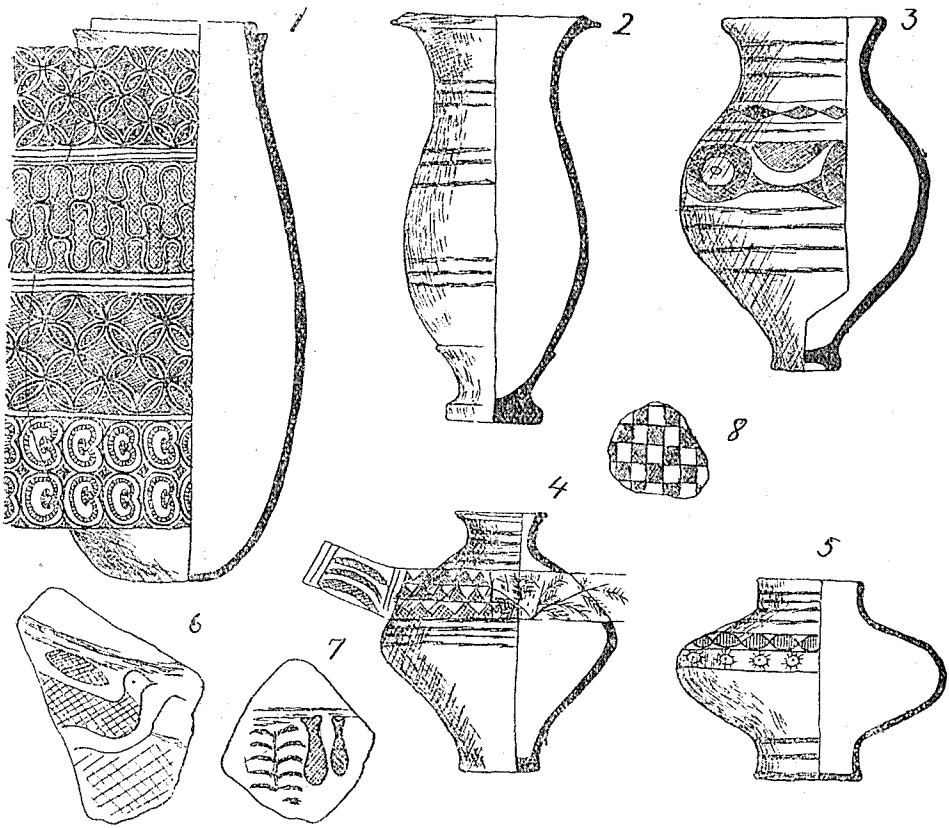
1は高さ六〇糎、口徑一九・五糎の大形のもの、底部のずつと細くなつて安定をかくものゝあるはこれと類似樣式のものを南印度のものに多く見出す時、興味深いものがある。無文。2は高さ四・三糎の小形で、前者に反して底は平たい。全表面は赤く塗られてゐたが、其の塗料の丹であつたか又は朱であつたかは記憶に殘つてゐない。3は高さ四・四糎、4は高さ四・二糎、5は高さ四糎、6は著しく頸が長くなつてゐるが、高さ六・八糎、10は高さ四・三糎の小形のものである。計數的に之をこゝに示すことは出來ないが、此種の小形土器が可成りに數多く發見されてゐるし、而して其の中では3及び5の形のものが比較的數多くを占めてゐる。7は徑一五糎・高さ一二糎、次の8 9 10 11などゝ共に椀形に屬するもの、13は杯形、14 15も同じく杯形であるが、手のあるのを注意すべく、16は高坏と呼ぶべきであるが、脚に孔の穿れてゐるのは何を意味するであらうか。18 20は甑（こしき）であらうか、腹部及び底に孔が穿れてゐる。12 19は土器臺（だい）と呼ぶべく、1の如き細長い底を有する土器を受ける臺として用ひられたものである。21 22は突形裝飾のあるもの、共に底が細長く作られて

第五圖　モヘンジョ・ダロ發見の土器



ゐるし、殊に22は鈕(つまみ)ある蓋を有してゐる。23は全く言葉の如き小形品(ミニエイチュア)で、23は高一・一糎、24は高さ八糎、此種のものも數多く出土してゐるが發掘者は余に玩具(トイ)であらうと説明してくれた

第六圖　モヘンジョ・ダロ發見の彩文土器



彩文土器（第六圖）此の遺蹟から發見された遺物の中、著しいものは彩文土器の一群であらう。1は大形の長壺で其の高さ七十糎、赤地に黑で圖の如き幾何學的文を現してゐる。2も赤地に黑を以て上中下三段に各三條の並行線を描いてゐる。高さ十糎の小形の壺である。4は白みがゝつた地に黑色で、直線文及び一種の植物文を帶文として施したもの、同じく壺で高さ二一糎。5は赤地に黑を以て一種の曲線文を現してゐる。6 7 8は土器殘片であるが、6には水鳥?、7には魚と水草?をあらはし、8には市松文樣を描き、すべて黑色の顏料を以てしてゐる。6

はスーサ第二期のものによく似てゐる。彩文土器は、其の發見個數が他の土器に比して少いが、器形に壺の多いことゝ、14の如き他の地方に類例のない文樣を有してゐる點は、これをアナウ・スーサなどから發見の彩文土器との關係を考へる上に重大なる意義を持つものであらう。

彫刻品　本遺蹟からは、銅製又は石質の彫刻小品が出土してゐるのでこれによつて其の時代の藝術の相當著しい進歩を遂げてゐたことを想知することが出來る。第七圖の男像は下體部を缺失してゐるが、石灰岩製、白色顏料を以て全身を塗り、貝を以て眼に嵌め、赤土を以て上衣を飾つてゐる。其の面貌のよく現在其の地方にすむ土人に似てゐるのを注意すべきだ。

第七圖

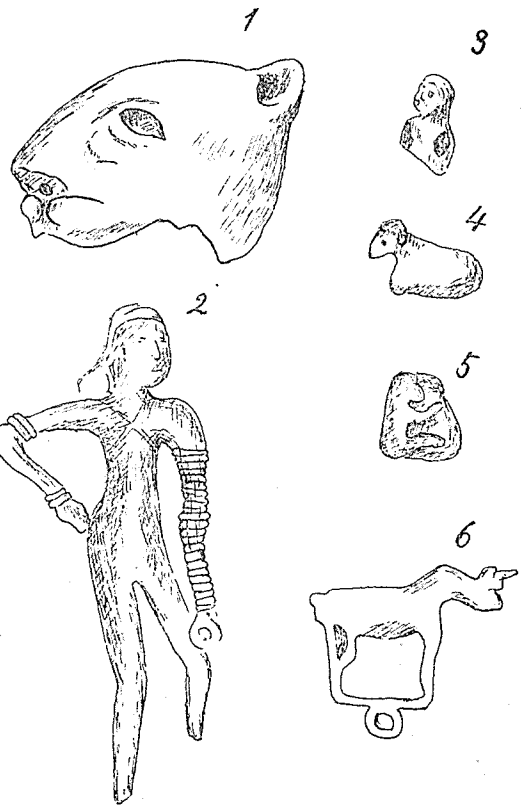
モヘンジョ・ダロ發見男子像

第八圖の1は石製、獅子か豹の頭であらう。其の手法は前者より遙かに自由で、寫實の域に入つてゐる。2は銅製、自分のスケッチが拙の爲め、事實を誤つたところがあるかも知れないが、頭に桂卷をし、左腕に十數個の釧をつけ、左足を輕くあげ、右腕をはつて腰につけて支をなし、舞踊の姿をつくつてゐる。3以下の小形品（ミニエイチユア）は、かゝる小形のものに寫實に近い姿を現し得る技術の進歩を示してゐる。3は4と共に凍石（ステイタイト）製、高さ一・五糎に過ぎない。猿の特徴がよく捉へられてゐる。4は牡羊（ライ）であらう。5も凍石製、髮針（ヘヤ・ピン）の頭飾品と考へられてゐるが、三匹の小猿が

抱き合つた姿を面白くあらはしてゐる。6は銅製何に用ひられたかを知らない。これが躍進(ガロツプ)の姿をとれば、スキタイのものといはれても、誰も之を否むまい。

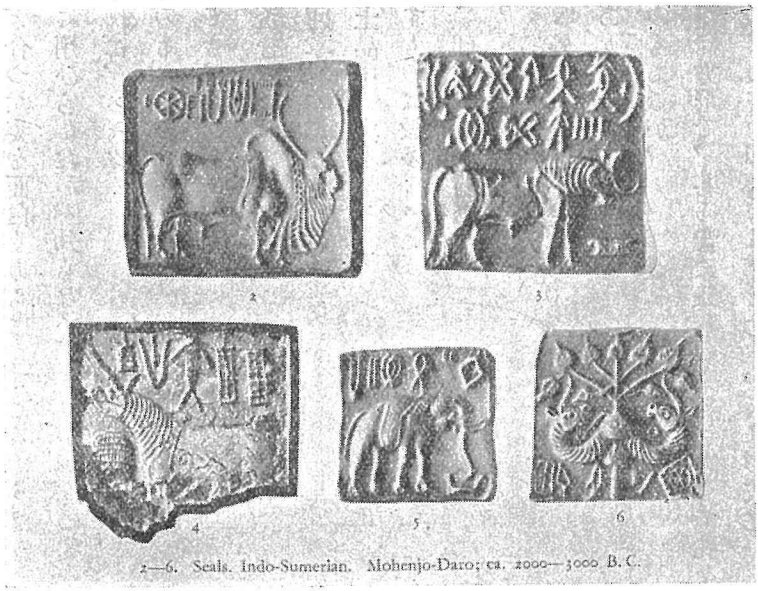
印章　本遺蹟出土品中の尤をなすものは數多くの印章(シイルス)であらう。凍石製のものゝ外に、象牙もあり、土製のものもあるが、多くは方形で、其の背に鈕狀の突起があつて孔を穿つてゐる。印面にはブラマン牛又は形式化したアスバタ樹の幹から有角獸の頭部の挺出したもの或は單に文字のみを象はしたものがある。其の文字的の圖紋に、第十圖の如き卍字文關係のものゝあるのも面白い。

第八圖　モヘンジョ・ダロ發見彫刻石



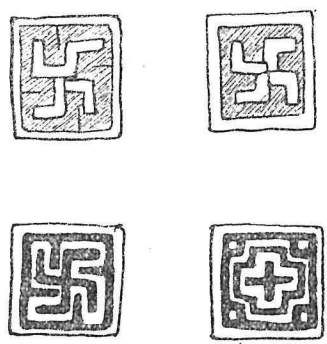
四、結語

さて此等の遺物は從來知られてゐる何處の文化と關係があるのか、また其の時代は何時かといふことについては、學者の說に定つたものがない。マアシャル氏は、其の發見の當初に於いては、たゞマウルヤ朝以前三世紀より數百年に溯る青銅器時代のものとする外、其の土器等はバルチ



第九圖　モヘンジョ・ダロ發見の印章

スタンのものと似て居り、ドラビダ族はバルチスタンから入り込んだらしい言語上の理由があるところから、其の方面との關係を揣摩す可きであらうと說いてゐられたが、①後、セイス敎授等の說を聞いてから、其の年代も之を紀元前三十世紀頃迄に溯らしめ、第一と第二との都市は前後數百年の差があるのみであつて、大體之を同一文化と見得べしとなし、ドラビダ族との關係の有無は解決を今日にまつべきであるとされた。②



第十圖　モヘンジョ・ダロ發見卍字印章

此のマアシャル氏によつて讀むことの出來ないと報ぜられた印章の文字を見て、英國のアッシリ

ヤ學の權威セイス(Sayce)教授は間もなく之に對して、マアシャル氏の報告した發見は、恐らく氏自身が想像したよりも驚く可き性質のもので、ド・モルガン(De Morgan)氏が、ペルシャのスーサ(Susa)で發見した「原エラマイト」文字を以て記した簿記の泥章(Proto-Elamite tablettes de Comptabilité)なるものと其の性質の全く同樣なものであると說かれた。③

スーサの發見は、モルガン氏其他によつて既に學界に報ぜられ、それが紀元前三千年代に屬するものであつて、余の考古學雜誌上に屢次報告してゐるウルの王基築造時代に次ぐ頃のものである。しからば、此の印章の出土は、やがて紀元前三千年代に印度河流域地方とスーサ地方との間に少くも文化の交通のあつたことを證明することになつたのである。

吾々は更にオツクスフオド大學とシカゴのフイルド博物館との協同發掘の下に成果をあげてゐるメソポテミヤのキシ(Kish)に於いて出土した凍石製の印章にこのモヘンジョ・ダロなどから出る印章に見る一角獸の形と全く同樣の形象を現してゐるものを發見するに及んで、印度との交通はスーサよりも更に西に進んでメソポテミヤの地にも達し、スメールと印度とが一の相等しい文化圈にあつたことをも知るに至つた。④

とはいへ、遺物のすべてを瞥見することの出來た自分は、印章や彩文土器に共通要素があるからといふても、同時に彩文土器自身に著しい地方色があることを見、かつ銅器や他の土器にも必しもメソポテミヤ地方のものと共通ならざるものゝあるを見る時、このインダス河地方の先史時代文化が、既に一の著しい地方色をなしてゐたことを主張したいと思ふ。

中印や南印との關係は、土偶或は玉などに類似

共通のものゝあるを發見し得るが、さりとて進んで文化圏の同じを肯定することの出來る程著しいものはない。而してそれと共に、凍石製人物像の顏容の全く現在の周圍にすむ土人に似てゐるのを想ふ時、此の問題にしてゐる文化を持つた人の子孫が、今もなほ其の附近に住み、一日七八拾錢の賃を受けて監視の笞の下に發掘の土砂を運んでゐるのではないかと想像する。

略記し了つて、あの沙漠の中に建てられた發掘事務所で、滯在五日間の厚意を謝し、砂塵を蹴つて五哩の道を自動車で走つた時、ゆくりなくも見た象や麒麟の群の放し飼されてゐる廣漠たる印度河ぞひの原野に起伏してゐる大小幾多の丘がすつかり發掘されて仕舞つたら、どんなに印度先史考古學の面目を一新して仕舞ふ樣な大發見が踏至するであらうかと想像して見たことを想ひ出した。

註

① Illustrated London News. 20. Sept, 1924

② 自分が印度で見た新聞記事及び Illustrated Indian News の短篇

③ Illustrated London News. 27. Sept. 1924.

④ Annual Bibliography of Indian Archaeology, for the year 1926. Leyden. 1928.